「N を V」動詞慣用句的使用現況與慣用用法：依據 BCCWJ 的調查結果

王淑琴

政治大學日本語文學系教授

摘要

本文透過語料庫調查，釐清「N を V」動詞慣用語的使用現況及其慣用用法，為日語教育提供有益資訊。具體而言，本研究有以下兩個目標：

(a) 調查「N を V」動詞慣用語在 BCCWJ 中的出現頻率。

(b) 根據「N を V」動詞慣用語中動詞形式的偏向，記述其慣用化的用法。

關於 (a)，由本研究的調查可得知經常使用的高頻「N を V」動詞慣用句有哪些。關於 (b)，本研究調查了「N を V」動詞慣用語中動詞的形態，並基於調查結果記述其慣用用法。由分析結果可得知，動詞形式存在偏向的慣用句，往往與特定表現一同使用，或出現在句子的特定位置，換言之，形式上的偏向經常與慣用用法相關聯。本研究以均衡語料庫為調查對象，並以儘可能準確的方式統計語料庫中的使用次數，提供了一份異於先行研究的高頻動詞慣用句清單。此外，透過「N を V」動詞慣用語中動詞形式的偏向，本研究亦釐清了這些慣用句部份的慣用用法。

關鍵詞：動詞慣用句、BCCWJ、出現頻率、形式偏向、慣用用法

受理日期：2025 年 03 月 10 日

通過日期：2025 年 06 月 06 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202506_(44).0008

Idiomatic Usage of “N を V” Verbal Idioms: A Study Based on BCCWJ

Wang, Shu-Chin

Professor, Department of Japanese of Chengchi University

Abstract

This study aims to elucidate the idiomatic usage of "N を V" verbal idioms through a corpus-based investigation and provide useful information for Japanese language education. Specifically, it has two research objectives:

(a) To investigate the frequency of "N を V" verbal idioms in the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ).

(b) To describe the idiomatic usage of "N を V" verbal idioms based on the formal biases of verbs.

Regarding (a), the investigation identifies frequently used "N を V" verbal idioms. Regarding (b), this paper investigates the verb forms of "N を V" verbal idioms and describes their idiomatic usage based on the investigation . The results show that idioms with a strong bias of verb forms tend to co-occur with certain expressions or appear in particular syntactic positions, suggesting that formal bias is often linked to idiomatic usage. This study differs from previous research by utilizing a balanced corpus to accurately quantify the frequency of idioms and providing a refined list of high-frequency "N を V" verbal idioms. Furthermore, it partially clarifies the idiomatic usage of "N を V" verbal idioms by analyzing the biases of verb forms.

Keywords: verbal idioms, BCCWJ, frequency of occurrence, formal bias, idiomatic usage

「N を V」動詞慣用句の使用実態と慣用的用法
－BCCWJ の調査から－

王淑琴
政治大学日本語文学科教授

要旨

本稿はコーパス調査を通じて「N を V」動詞慣用句の使用実態とその慣用的用法を明らかにし、日本語教育に有益な情報を提供することを目的とする。具体的に、以下の二つの研究目的がある。
(a)BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の出現頻度を調べる。
(b)「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏りからその慣用化した用法を記述する。

(a)について、本稿の調査によりよく使用される高頻度の「N を V」動詞慣用句にはどのようなものがあるかが明らかとなった。(b)について、本稿は「N を V」動詞慣用句の動詞の形を調査し、その結果に基づいて慣用的な用法を記述した。動詞の形に偏りが見られた慣用句は、特定の表現と共起したり、文の特定の位置に現れたりなどの現象が見られ、つまり、形式的な偏りはしばしば慣用的な用法と結びつくということである。本稿は、均衡コーパスを使用し、コーパスにおける使用回数をなるべく正確に出すという調査方法で先行研究と違った、高頻度の動詞慣用句リストを提供できた。また、「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏りからその慣用的な用法を一部明らかにした。

キーワード：動詞慣用句、BCCWJ、出現頻度、形式的偏り、慣用的用法

「N を V」動詞慣用句の使用実態と慣用的用法
－BCCWJ の調査から－

王淑琴
政治大学日本語文学科教授

1. 研究目的

本稿はコーパス調査を通じて「N を V」動詞慣用句の使用実態とその慣用的用法を明らかにし、日本語教育に有益な情報を提供することを目的とする。具体的に、以下の二つの研究目的がある。

(a)BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の出現頻度[1]を調べる。

(b)「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏りからその慣用化した用法を記述する。

(a)について、慣用句を構成的に解釈するのが難しいなどの特徴があるため習得が難しく、効率的かつ効果的に学習する方法として、頻繁に使われるものを優先して学習するという主張(ダニー・佐野 2001)がある。コーパスにおける慣用句の出現頻度を調べる研究がいくつかあるが、使用するコーパスのジャンルが限られていたり、或いは概算という方法が用いられ正確な使用回数が分からないという問題点がある。日本語教育の立場から見ると、どういう慣用句を導入すればよいかを考える際に出現頻度が重要な基準の一つになると思われる。本稿は、BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の出現頻度を調べ、日本語教育に利用できる情報を提供したい。宮地(1982)によると、各品詞の慣用句のうち、動詞慣用句の数がもっとも多く、また、動詞慣用句のうち、「N を V」タイプの動詞慣用句がもっとも多い[2]。つまり、形式から見ると「N を V」タイプの動詞慣用句がも

[1]本稿における「出現頻度」という用語は、「使用回数」と同じ意味を表す。
[2]宮地(1982: 242)は収録した「常用慣用句」のうち、動詞慣用句がもっとも多く全体の 63%を占めており、また、動詞慣用句について、「N を V」「N に V」「N が V」タイプの慣用句がそれぞれ 57%ほど、20%ほど、20%ほどであるとしている。

っとも多いのである。「N を V」動詞慣用句を調査することである程度日本語の慣用句の使用実態が見えてくると考えられる。

「N を V」動詞慣用句を調査対象にするもう一つの理由は、上記の(b)の目的と関連している。宮地(1982)が指摘したように、慣用句は動詞の形が制約を受けているものがある。例えば、「うしろ指を指される」「気を取られる」のような一般に受身形を取るもの、「肩をいからせる」「口をとがらせる」のような一般に使役的他動詞を取るもの、「手段をえらばない」「目もくれない」のような一般に否定形をとるものなどがあるとしている。しかし、辞書で動詞のル形で登録される慣用句でも、ほとんど決まった動詞の形で使われるものがある。例えば、(1)の「心をこめる」は、多くの場合テ形で使われ連用修飾の機能を果たし、(2)の「目を奪う」は多くの場合受身形で使われる。

(1)マダムが心を込めて作ったケーキは、季節の果物を巧みに取り入れているのが特徴だ。

(2)たくさんの素晴らしい作品に来場者は、目を奪われていました。

慣用句は意味と形式の慣用化を伴うものであり、慣用化が進んだものは上記の例のように動詞の形に偏りが見られ、多くの場合辞書で登録される形式とは違った形で使われている。そのような慣用化が進んだものの記述は日本語教育に役にも立つと思われる。本稿は、(1)(2)のような動詞の形に偏りが見られる「N を V」動詞慣用句にはどのようなものがあるかを調査し、動詞の形の偏りから「N を V」動詞慣用句の慣用的な用法を明らかにしたい。以下、2 節で(a)(b)と関連する先行研究、3 節で調査方法、4 節と 5 節で調査結果、6 節でまとめと今後の課題を述べる。また、本稿は BCCWJ を調査対象にしているため用例の出典を省き、出典が明示されない用例はすべて BCCWJ によるものである。

2. 先行研究

(a)の研究目的について、コーパスにおける慣用句の出現頻度を調べる研究には以下のようなものがある。ダニー・佐野(2001)は新潮文庫(CD-ROM 版)、青空文庫(CD-ROM 版)と毎日新聞(2000 年 CD-ROM 版)の三つのコーパスとテキスト処理プログラムを用いて、127 個の「NPV」型(「N を V」「N に V」「N が V」「N で／から／と V」が含まれる)の慣用句の出現頻度を調べた。論文にはそれぞれのコーパスにおけるトップ 20 の「NPV」慣用句が示され、それにより文学ジャンルと新聞ジャンルにおける「NPV」慣用句の違いが明らかになった。ダニー・佐野(2001)が作成したリストは、日本語研究のためのコーパスが構築されていなかった時代に作られたものであり、現在は巨大な均衡コーパスが利用できるようになっているので、新しいリストを作成する必要があると思われる。北村・川村(2017)は、日本語教育における慣用表現の教育／学習方法設計のための基礎データを提供することを目的に、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の 2014 年の記事データベースを用いて、新聞における慣用表現の出現頻度を調査している。論文では、出現頻度が高く 3 紙に共通に現れる 73 個の慣用句が示され、新聞でよく使われる慣用句が明らかとなった。

上記の二つの研究は、使うコーパスが言語研究の目的で作られたものではない、また、プログラムを使って慣用句を抽出するという特徴がある。これに対し、呉(2017)は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を使って、目視による精査と概算[3]という方法で 926 個[4]の慣用句の出現頻度を調べ、下記のように区分 1～区分 5 に分け

[3]検索結果の画面では最大で 500 件しか表示できないため、用例が極めて多い場合は、表示した 500 件のうちの有効な用例数を調べ、そのパーセンテージを総件数にかけて有効な用例数を概算する方法を取っている(呉 2017: 24)。つまり「(有効な用例数／500 件) ×総件数」で概算するのである。

[4]呉(2017)は佐藤(2007)及び橋本・河原(2008)により選出された 926 個の慣用句を対象にしているが、「口にする」「口を利く」「口を切る」「調子に乗る」「手にする」「手を打つ」「鼻に付く」「間に合う」「物にする」「用を足す」という 10 個の慣用句を二つの用法を持つ多義的なものとして扱うため、表 1 における慣用句数（=n）の合計が 936 になる。

ている(Xは各慣用句の使用度数、nは各区分に含まれる慣用句の数を示す)。

表 1 呉(2017: 25)の慣用句区分(筆者が製表)

区分 1	ほとんど使わない慣用句	(0≦X＜12、n=184、全体の 19.7%)
区分 2	まれに使う慣用句	(12≦X＜24、n=188、全体の 20.1%)
区分 3	たまに使う慣用句	(24≦X＜40、n=188、全体の 20.1%)
区分 4	ときどき使う慣用句	(40≦X＜90、n=186、全体の 19.9%)
区分 5	よく使う慣用句	(　　X≧90、n=190、全体の 20.3%)

呉(2017)は、慣用句を出現頻度に基づいていくつかの区間に分類しているが、BCCWJでそれぞれの慣用句が具体的にどれぐらい現れているかを示していない。また、どういう用例を扱うなど用例処理の具体的な方法が示されておらず、概算という方法では多少誤差があるので、BCCWJにおける慣用句の出現頻度を知るにはより緻密な調査が必要であると思われる。

(b)の研究目的について、統語的な操作により動詞慣用句の緊密度を計り、それにより動詞慣用句の類型化・階層化をはかろうとする研究が多く見られる(飛鳥 1982、坂本 1982、森田 1994、石田 2000、2004)。例えば、石田(2000)は、以下の十個の指標で動詞慣用句の形態的な緊密性を計り、それにより動詞慣用句を階層化している。

【1】名詞句へ転換する　　【6】敬語表現にする
【2】受身表現にする　　【7】連用修飾語を挿入する
【3】命令表現にする　　【8】肯定・否定表現にする
【4】意志表現にする　　【9】連用修飾語を付加する
【5】連体修飾語を付加する　　【10】慣用句を修飾成分にする

例えば、「手をつける」について、(3)から【2】の指標に合っている、(4)から【1】の指標に合っていないことがわかる。

(3)山路は、復興の手もつけられていない街を見た驚きを、何度も繰り返した。(『空白』219)　(石田 2000: 30)

(4)手を着ける　→　*着ける手／*着けた手／*着けている手

(石田 2000: 30)

形態的な操作で動詞慣用句の類型化や階層化ができると思われるが、日本語教育への応用を考える場合、動詞慣用句の慣用化した用法を記述する必要がある。つまり、形式的にどういう偏りが見られ、また、その偏りがどういう意味や用法とつながるかを記述することである。本稿は、「N を V」タイプの動詞慣用句に焦点を当て、その動詞の形にどういった偏りが見られ、どういう慣習的な用法があるかを明らかにしたい。

3. 調査方法

3.1 用例の収集と処理

使用するコーパスについて、慣用句は話し言葉よりも書き言葉で使われる傾向があると思われ、本稿は「現代書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を選んだ。また、1 節で述べたように、慣用句の中で形式的にもっともよく見られるのは「N を V」タイプの動詞慣用句なので、「N を V」動詞慣用句にしぼって調査を行う。まず、呉(2017)と同様に、佐藤(2007)及び橋本・河原(2008)により選出された 926 個の慣用句から「N を V」動詞慣用句を計 341 個抽出し、研究対象とした[5]。

本稿は、コーパスにおける使用回数をなるべく正確に出したいので、中納言アプリケーションで語彙素読み検索で「N を V」動詞慣用句の動詞を含む用例をダウンロードして、そのファイルを対象にさらに格名詞を含む用例を抽出した。例えば、「匙を投げる」の場合、語彙素読み検索で「ナゲル」を含む用例をダウンロードして、Excel で「匙／さじ／サジ」を含む用例にタグをつける。用例を集計する際に基づく意味的、形式的基準を以下の小節で述べる。

[5]「N を V」の形式の動詞慣用句のみである。「修飾語＋N を V」（例えば、「赤子の手をねじる」）、「N に N を V」（例えば、「手に汗を握る」）、「N を V－否定・使役・受身」（例えば、「跡を絶たない」「顔を曇らせる」「足元を見られる」）の形式の動詞慣用句を対象にしなかった。

3.1.1 意味的基準について

慣用句の意味について、三冊のオンライン慣用句辞典[6]で調べ、もっとも意味が広い解釈を慣用句の意味として採用した。これは、慣用句の用例に当たるかどうかという選別作業をなるべく最小限にしたいからである。例えば、「水を差す」の場合、goo 辞書の「慣用句・ことわざ」には「わきから邪魔する」という語釈に加えて、ほかの二冊にない「水を加えて薄くする」という語釈も載っており、三冊の慣用句辞典の中で意味解釈がもっとも広いので、その意味に基づいて「水を差す」の用例として集計するかどうかを判断する。

慣用句辞典における語釈の違いは、連語的慣用句と比喻的慣用句の連続性を反映していると思われる。宮地(1985)は、句を一般的連語句と成句に分け、成句をさらに慣用句とことわざ・格言に分けている。慣用句には連語的慣用句と比喻的慣用句があり、また比喻的慣用句には直喩的慣用句と隠喩的慣用句があるとしている。

- 句
  - 一般連語句
  - 成句
    - 慣用句
      - 連語的慣用句
      - 比喩的慣用句
        - 直喩的慣用句
        - 隠喩的慣用句
    - ことわざ・格言

宮地(1985: 63)

宮地(1985)は一般連語句と慣用句、そして、慣用句の内部における連語的慣用句と比喩的慣用句の間は境界線が明確ではないと指摘している。例えば、連語的慣用句と比喩的慣用句の連続性について、「あぐらをかく」を挙げて説明している。「あぐらをかく」は、①「す

---

[6]次の 3 冊である。
(1) goo 辞書＞国語辞書＞慣用句・ことわざ
（https://dictionary.goo.ne.jp/jn/category/慣用句・ことわざ/）
(2) Imidas＞日本語辞典＞ルーツでなるほど慣用句辞典
（https://imidas.jp/idiom.html）
(3)ことわざ辞典 ONLINE(https://kotowaza.jitenon.jp/)

わりかたの一つで、前に投げ出した足を折って組む」という語釈は連語的慣用句に当たり、②「権力や地位のうえに、やすんじて居すわる」という語釈は、全体として比喩的な意味を派生していると認められ、比喩的慣用句に当たるとしている。上で見た「水を差す」の場合も同様に、goo 辞書の「慣用句・ことわざ」の語釈にはその連語的慣用句と比喩的慣用句の意味が示されている。つまり、「水を加えて薄くする」という語釈は「連語的慣用句」、「わきから邪魔する」という語釈は「比喩的慣用句」に相当し、どちらも「水を差す」という慣用句の意味と言える。このように、連語的慣用句、比喩的慣用句が連続的で境界線を引くことが難しいので、同じ慣用句の意味の違いで用例を集計するかしないかを判断するのをなるべく避けたい[7]。ただし、慣用句辞典に載っていない意味の用例を認めない。例えば、「骨を折る」は、どの辞典も「労力を要する。苦労する」の意味しか載っていないので、次のような具体的な動作を表す意味の用例は集計しない。

(5)「踏み台から転落して骨を折った」という話はよく聞くところです。

3.1.2 形式的基準について

「N を V」動詞慣用句は、辞書に登録した形式と異なる形で使われる場合があるが、そのようなものを集計するか否かは以下の原則を立てて処理した。

① 格名詞の表記が異なるものは集計する。

例 :「出端を挫く」の格名詞に「出端」「出ばな」「出鼻」があり、すべて用例として集計した。

② 格助詞が省略されたもの、取り立て助詞にとってかわられたものは集計する。

[7]査読者の一人から「連語的慣用句」の解釈は非慣用的な意味用法であるという意見を受けた。実際に用例を判断するときに連語的慣用句、比喩的慣用句の区別が難しい場合がかなりあり、本稿は語釈がもっとも広い、つまり、選別が少ない基準を採用した。

例 :「腰抜かして動けなくなる」「顔も出さなかった」ような用例も集計した。

③ 格名詞の変異形について、格名詞の下位語[8]でしかもほぼ意味が変わらないもののみ認める。

例:「両目をつぶる」の用例を「目をつぶる」の用例として集計した。格名詞「両目」は「目」の下位語で、また、「両目をつぶる」は「目をつぶる」とほぼ意味が変わらないからである。

ただし、格名詞の下位語による動詞慣用句は慣用句辞書や一般辞書の語彙項目や用例として掲載される場合は、別の慣用句として見なし集計しない。

例 :「片意地を張る」の用例があり、上記の原則に従うと「意地を張る」の用例として集計することになるが、「片意地を張る」を一つの項目として載せている慣用句辞書もあるので、「意地を張る」とは別の慣用句として扱い、集計しなかった。

④ 名詞句化した(「N の V かた／V よう／V すぎ」)用例は集計する。

例 :「力の入れ方／入れよう／入れすぎ」は「力を入れる」の用例として集計した。

3.1 で用例の収集と処理方法を述べた。3.2 で本稿が動詞の形に付けたタグの種類と定義を述べる。

3.2 タグの種類と定義

本稿は「N を V」動詞慣用句における動詞の形に偏りが見られるかを見るため、3.1 の作業によって慣用句の用例として認められたすべての用例に表 2 に示される 15 種類のタグをつけた。益岡・田窪(1992: 16-17)の定義を参考にし、テ形複合動詞のうち、アスペクトに

---

[8]石田(1998)は慣用句の名詞の変異形として次のような例を挙げている。

・目が飛び出る／目玉が飛び出る／目の玉が飛び出る
・耳に挟む／小耳にはさむ　　・鼻で笑う／鼻先で笑う／鼻の先で笑う
・鼻であしらう／鼻の先であしらう　　・鼻を折る／鼻柱を折る
・口を合わせる／口裏を合わせる　　・眉をひそめる／眉根をひそめる

(石田 1998: 47)

変異形の判断基準が難しいので、本稿は格名詞の変異形として判断しやすい下位語の種類のみ認める。

関係するもの(「～ている、～てある、～てしまう、～ていく、～てくる」)の用例を【テ形アスペクト】に分類し、授受に関係するもの(「～てもらう」「～ていただく」「～てくれる」「～てくださる」「～てあげる」「～てやる」「～てさしあげる」)、また、その他に分類されるもの(「～ておく」「～てみる」「～てみせる」)の用例を【テ形複合】に分類する。動詞に二つ以上の形が含まれる場合(例えば、「声を掛けなかった」(否定形＋タ形))、最初の形(否定形)の用例として扱う。また、それぞれのタグに丁寧形(例えば、「～ます」「～ました」「～ません」など)の用例も含まれる。

表 2 本稿が付けた「N を V」動詞慣用句のタグの種類と定義

タグの種類	定義	例
【ル形】	動詞がル形の用例	「物価の安さにも目を見張る。」
【タ形】	動詞がタ形の用例	「ハニーはびっくりして身を引いた。」
【否定形】	「～ない」「～ぬ」「～ず」「～なければならない」「～ざるをえない」の用例	
【連用形】	動詞連用形で後続文に接続する用例	「まともな人生コースに見きりをつけ、雑職家になった。」
【条件形】	動詞が条件形の用例	「(略)耳を澄ませば聞こえるような気がした。」
【使役形】	動詞が使役形の用例	「金に物を言わせない、素敵な彼ですね。」
【受身形】	動詞が受身形の用例	「(略)ぶっきらぼうに言ったセリフに、なんだか胸を打たれてしまった。」
【可能形】	動詞が可能形の用例	「全くやる気が出なく、1ヶ月も手がつけられずにいます。」
【敬語】	動詞が尊敬語の形の用例	「利用者からのアドバイスに目を通されてますか(動詞受身形)「皆さま外出する時は足元にお気をつけください。」(お～ください)等
【命令形】	動詞が命令形の用例	「目を覚ませよ！」
【意向形】	動詞が意向形の用例	「あなたは手を貸そうとしただけなのに。」

【テ形節】	動詞テ形で後続文に接続する用例	「克哉は背を向けて、駒沢通りを走り出した。」
【テ形アスペクト】	「～ている、～てある、～てしまう、～ていく、～てくる」の用例	
【テ形複合】	「～てもらう」「～ていただく」「～てくれる」「～てくださる」「～てあげる」「～てやる」「～てさしあげる」の用例、「～ておく」「～てみる」「～てみせる」の用例	
【その他】	上記に分類できないもの	「(略)、緑が顔を出しそうな気配だ」 「バックはしきりに鼻を鳴らしながら(略)」

以下、4 節で「N を V」動詞慣用句の出現頻度と分布、5 節で動詞の形に偏りが見られる「N を V」動詞慣用句を見る。

4. 「N を V」動詞慣用句の出現頻度と分布

「N を V」動詞慣用句の頻度分布を表 3 にまとめる。表 3 から次のことが分かる。

(A) 用例数が 100 例以下のものは 210 個あり全体の 6 割強を占めている。よく使用される「N を V」動詞慣用句が限られている。

(B) 用例数のカバー率[9]で見ると、BCCWJ で 100 例以上現れる「N を V」動詞慣用句は、用例全体の 84.0%を占めている。つまり、頻度が高い(100 例以上現れる)131 個(341-210=131)の慣用句の用例合計が用例数全体の 8 割以上を占めている。

表 3 BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の頻度分布

頻度区間	慣用句数(個)	慣用句数の割合	用例数合計(例)	用例数のカバー率
>1000	3	0.9%	9,090	17.6%
999~900	4	1.2%	3,776	25.0%
899~800	2	0.6%	1,647	28.2%

[9]累積使用率の値はカバー率ともいい(計量国語学会 2017: 25)、ここでは「N を V」動詞慣用句の出現頻度の合計が全体の用例数(延べ語数)に占める割合を示している。

799~700	3	0.9%	2,251	32.5%
699~600	5	1.5%	3,168	38.7%
599~500	3	0.9%	1,655	41.9%
499~400	9	2.6%	3,956	49.6%
399~300	5	1.5%	1,740	52.9%
299~200	26	7.6%	6,206	65.0%
199~100	71	20.8%	9,817	84.0%
<100	210	61.5%	8,231	100.0%
合計	341	100.0%	51,537	

(A)(B)の結果から、よく使用する「N を V」動詞慣用句は限られており、また、頻度が高い(用例数が 100 例以上の)ものが用例数全体の 8 割以上を占めているので、日本語教育の場合、高頻度のものを中心に教えると効率がよいと言えよう。ダニー・佐野(2001)は、記憶の負担量に視点を置くと、頻繁に使われる慣用句を優先して学習するのが効率的かつ効果的な学習法であると述べている。一方、蘇(2018)は、日本語母語話者と日本語学習者に定式表現(コロケーション及び慣用句)の再生課題を与え、課題遂行時間を分析した。その結果、日本語学習者は心内辞書に定式表現が少ないが、習得している定式表現に関しては母語話者のように文を細かく分析せずに固まりとして処理できることが分かった。その結果から、定式表現は固まりとして日本語教育の初期から導入することを主張し、母語話者コーパスで高頻度かつ複数のジャンルで広く使用される定式表現を優先的に導入することで、自然なインプットに出現する可能性の高い定式表現を指導でき、学習者の言語処理を促すことにつながると述べている(p.219)。慣用句は構成要素の意味を足しても全体の意味にならないもので[10]、意味が分からなければ文章の理解に支障が生じるものであるが、「N を V」動詞慣用句の大半はコーパスにおける使

[10]籾山(2002: 123)は、慣用句の定義として語同士の結びつきが固定しているに加えて、構成要素である各語の意味から句全体の意味が導けないものであると述べている。

用回数が低いもので、優先的に教えるべきものではない。日本語教育の場合、よく使用される高頻度のものを何らかの形で導入すればよいと考えられる。

用例数が 100 回以上計 131 個の「N を V」動詞慣用句を付録にまとめる。付録から次のことが分かる。

(C)「声をかける」「気をつける」は 4000 例近くあり、出現頻度が非常に高く、日本語教育の早い段階で導入すべきものである。

付録の 131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、「声をかける」、「気をつける」は飛びぬけて使用回数が多い。「声をかける」「気をつける」の動詞「かける」「つける」は、国立国語研究所が行った「日本語教育のための基本語彙調査」[11]ではどちらも「より基本的な語」である。また、NLB[12]で「～をかける」「～をつける」のコロケーションを調べたところ、その頻度と LD 値[13]がもっとも高いのはそれぞれ「声をかける」、「気をつける」である。このことから、「声をかける」、「気をつける」は基本的でよく使われる慣用句であることが分かる。「かける」「つける」という動詞を導入する時点で教えるべき動詞慣用句と言える。

以上で見たように、「N を V」動詞慣用句は数が多いが、よく使用されているものが限られており、日本語教育の場合、高頻度のものを何らかの形で導入すればいいと考えられる。特に「声をかける」「気をつける」は出現頻度が非常に高く、早い段階で導入する必要がある。

---

[11]国立国語研究所(1984)の資料によるものである。『日本語教育のための基本語彙調査』では 6060 語の基本語彙が収録され、そのうちの 2030 語がより基本的な語である(p.21)。

[12]NLB は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。（https://nlb.ninjal.ac.jp　2025.02.28 閲覧）

[13]LD 値は NLB でコロケーションを分析する指標の一つである。詳しくは赤瀬川史朗など(2016)参照。

5. 「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏り

この節では使用回数が 100 回を超える 131 個の「N を V」動詞慣用句を対象に、動詞の形に偏りが見られるものはコーパスでどのように使われているかを見る。本稿では半分以上の用例が特定の動詞の形で使われる場合、動詞の形に偏りが見られると判断する。131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、動詞の形に偏りが見られたのは【ル形】【タ形】【否定形】【受身形】【テ形節】【テ形アスペクト】の用例である。そのうち、【テ形アスペクト】は慣用的な用法が観察できなかった。それを除いて以下の小節で動詞の形に偏りが見られるものとその慣用的な用法を見る。

5.1【ル形】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、ル形でもっとも多く現れ半分以上を占めた慣用句を表 4 にまとめる。

表 4 【ル形】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

慣用句	使用回数	ル形で使われる用例数	ル形で使われる割合
流れをくむ	134	109	81.3%
人目を引く	112	75	67.0%
目を引く	346	219	63.3%
言葉を返す	181	110	60.8%
水を差す	106	55	51.9%

表 4 の慣用句のうち、「流れをくむ」「言葉を返す」は慣用的な用法が見られた。「流れをくむ」はル形で使われる 109 例中[14]、102 例が次のように、「～の流れをくむ」＋「名詞」の形で名詞修飾節で使われる。一方、「言葉を返す」はル形で使われる 110 例中、倒置の形「返す言葉」で使われるのが 94 例あり、また、その後続表現にほとんど否定表現(「ない」や「V－ない」)が来る。

[14]109 例中に丁寧体の例が 1 例含まれる。

(5)第一章で紹介したように、井上家はこの「今日庵」の流れを汲む「柳日庵」を代々継承して来た。

(6)「飲まなくても出席するのが責任者だろう」と言われたら、返す言葉がない。

「流れをくむ」「言葉を返す」はル形で多く使われるが、ともに文末ではなく名詞を修飾する用法として文中に現れるという特徴があると言える。

5.2【タ形】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、タ形でもっとも多く現れ半分以上を占めた慣用句を表 5 にまとめる。

表 5 【タ形】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

慣用句	使用回数	タ形で使われる用例数	タ形で使われる割合
耳を疑う	102	79	77.5%
目を疑う	118	72	61.0%
胸をなで下ろす	182	106	58.2%
幕を開ける	108	59	54.6%
口を挟む	513	278	54.2%
世を去る	275	145	52.7%

表 5 の慣用句は、「幕を開ける」を除いて人間の様子や態度を表すものである。また、用例の多くは文末に現れるという傾向が見られる。表 6 はタ形で使われる用例のうち文末に現れる用例数[15]とその比率をまとめたものである。表 6 から、タ形で多く使われる動詞慣用句は、文末に現れる割合が高いことが分かる。

表 6 「耳を疑う」などの慣用句が文末に現れる用例数と比率

慣用句	タ形で使われる用例数	文末で使われる用例数と比率
耳を疑う	79 (100%)	69 (87.3%)

[15]「。」の直前がタ形である文、つまり、「た。」や「ました。」の形式を持つ文である。

目を疑う	72 (100%)	60 (83.3%)
胸をなで下ろす	106(100%)	88 (83.3%)
幕を開ける	59 (100%)	40 (67.7%)
口を挟む	278(100%)	260(93.5%)
世を去る	145(100%)	94 (64.8%)

表 6 で文末に現れる割合が特に高い「耳を疑う」「目を疑う」「胸をなで下ろす」「口を挟む」は、文末に現れ (7)～(10)のように文学作品における地の文で登場人物を描写する場合に使われる。叙述内容に対し登場人物がどういう身体的・心理的な反応があるかをこれらの慣用句によって表現している。

(7)「こうなったらあの土地から手を引かれたら」門野は耳を疑った。

(8)その壁ぎわのソファに、霧子がこちらを見たまま坐っている。一瞬、秋葉は自分の目を疑った。

(9)昨日と変わらない表情の社長を見て私はほっと胸をなで下ろした。

(10)「でも…蜃気楼なんでしょ？」白馬が口を挟んだ。

以上で見たように、「耳を疑う」「目を疑う」「胸をなで下ろす」「口を挟む」は文末に現れ、文学作品で登場人物の身体的・心理的な反応を表す場合に使われる傾向が強い。

5.3【否定形】に偏りが見られた動詞慣用句

131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、否定形でもっとも多く現れ半分以上を占めた慣用句を表 7 にまとめる。

表 7 【否定形】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

慣用句	使用回数	否定形で使われる用例数	否定形で使われる割合
引けを取る	124	107	86.3%
口を利く	341	226	66.3%
耳を貸す	205	108	52.7%

「引けを取る」は、ほとんど否定形で使われ、それ以外の形で使われる場合もほとんど後ろに「ない」が来る((11)(12)参照)[16]。否定形や否定的表現とともに使われる慣用句と言える。

(11)この鈴木君も小野田君にひけをとらないぐらいすごい！

(12)しからば武士は、一歩もひけをとることなく、相手を圧して生きるべきであった。

「口を利く」「耳を貸す」は表 7 で見ると、否定形で使われる割合がそれほど高くないように見えるが、ほかの形で使われる場合も否定形を伴うので、否定用法が中心である慣用句と言える。本稿は動詞に二つ以上の形が含まれる場合最初の形の用例として扱うため、例えば、動詞の形が「可能＋否定」のものは【可能形】の用例に分類される。そのような用例も含めると「口を利く」「耳を貸す」は否定形で使われる割合が表 7 に示されるものより高くなる。「口を利く」は否定形のほかに、(14)(15)のように可能形や「テクレル」と共起する場合もほとんど否定形で使われる。否定形と共起するのがその主な用法であると言える。

(13)疲れ果て、だれもほとんど口をきかず、ただただ朝食のことしか頭になかった。

(14)根塚はしばらく、驚きと怒りで口も利けなかった。

(15)でも、食欲がなく食べれなかったのでそれから怒って口を利いてくれません。

「耳を貸す」は否定形のほかに、(17)のように意向形で使われる 28 例もすべて否定であることを考えると、否定形と共起するのがその主な用法であると言える。

(16)夫の説得は一ヵ月続いたが、私は断固として耳を貸さなかった。

---

[16]後ろに「ない」が来ないのが次の 2 例のみであり、いずれも他者に負けることを望ましくない事態として捉えている。

(i)ほかでもない消費者のほうが大きな車を要求していたというのに、私はなぜガロンで三十マイル走る小型車をつくらなかった、なぜ賢い日本人にヒケをとったかと、責められた。

(ii)指導者も含めて育成の環境が他のスポーツに引けをとりすぎている。

(17)昔のきみは他人の忠告に耳を貸そうとしなかった。

以上で見たように、「引けを取る」、「口を利く」、「耳を貸す」は主に否定形や否定的表現とともに使われる慣用句であると言える。

5.4【受身形】に偏りが見られた「N を V」慣用句

131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、受身形でもっとも多く現れ半分以上を占めた慣用句を表 8 にまとめる。

表 8 【受身形】に偏りが見られた「N を V」慣用句

慣用句	使用回数	受身形で使われる用例数	受身形で使われる割合
目を奪う	183	155	84.7%
度肝を抜く	119	81	68.1%
レッテルを張る	144	93	64.6%
目を注ぐ	134	69	51.5%

「目を奪う」「度肝を抜く」は、持ち主の受身文[17]で使われ[18]、動作主体がある種に刺激によって視覚的、心理的な反応を誘発される場合に使われる。

(18)たくさんの素晴らしい作品に来場者は、目を奪われていました。

(19)早足で追った二人は、新たに生じた光景に、度肝を抜かれた。

これに対し、「レッテルを張る」は持ち主の受身文のほか((20))、(21)のような直接受身文[19]も十数例あり、両方の受身文で使われている慣用句である。

(20)いつしか沼田は社内で孤立し、他社の記者から“悪徳”のレッテルを貼られるようになっていた。

---

[17]「持ち主の受身文とは、対応する能動文の補語として表される物の持ち主を主語として表現する受身文である」(日本語記述文法研究会 2009: 215)。

[18]「目を奪う」の場合、次のように直接受身文で使われる例が数例ある。

(i)現代という時代は、外面的な条件を自分の思うように、都合よく変えようとすることにばかり、人々の目が奪われている時代のようです。

[19]「直接受身文とは、対応する能動文の補語の表す人や物を主語として表現する受身文である」(日本語記述文法研究会 2009: 215)。(21)は「(人々に) レッテルが貼られる」という構造であり、その能動文「人々がレッテルを貼る」との関係を見ると直接受身文である。

(21)瞑想というのは危険なほど濫用されている表現だ。静穏や静寂というとすぐ「瞑想」というレッテルが貼られる。

一方、「目を注ぐ」は、すべて(22)のような直接受身文で使われている。「目を奪う」と同様にヲ格名詞が身体部分であるが、使われる受身文の種類が異なる。これは、「目を奪う」全体が「引き付ける」に相当する意味を表し、ヲ格名詞と動詞の意味が一体化しているのに対し、「目を注ぐ」は「注目を注ぐ」のようにヲ格名詞と動詞の意味を分解することが可能なため、ヲ格名詞を主語にする直接受身文が成立するのであると考えられる。

(22)キロ二千円の上物から百円以下で投げ売りされるものまで、評価の差は大きい。鮮度落ちが早いマイワシに、仲買人の厳しい目が注がれている。

「目が注がれる」は単に「目を注ぐ」の受身表現ではなく、形式と意味が固定化し、慣用化が進んでいる表現になっている。まず、形式の面では、受身形で使われる 69 例中、53 例が(23)のように格名詞の前に修飾表現が来て、格名詞と動詞の間に着点を表すニ格の名詞句が来る。ちなみに、「目を注ぐ」の非受身形の例 65 例中にこのような現象が見られたのはわずか 7 例で、ここから「目が注がれる」は決まった構文で使われ形式が固定化していることが窺える。

(23)アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど世界の目が日本に、そして日本人のあなたに注がれているのだ。

慣用句には形態的な緊密性という特徴が見られ、構成要素の間に語句を挿入することができず(籾山 2002)[20]、動詞慣用句の場合、連体修飾語の付加が形態的な緊密性を計る指標になっており、その操

[20]籾山(2002)は慣用句における構成要素の結びつきに固定性があり、その間にほかの要素が入りにくいと指摘している。
(i) a． A さんが我々のために一所懸命骨を折ってくれた。
　b． *A さんが我々のために骨を一所懸命折ってくれた。
(ii) a． B さんの研究は見事に実を結んだ。
　b． *B さんの研究は実を見事に結んだ。　　籾山(2002: 125)

作が許されない慣用句もある(森田 1994、石田 2004)[21]。つまり、「目が注がれる」は「目を注ぐ」とは違って、ほとんど慣用句の形態的な緊密性を破る使われ方をしているということである。

「目が注がれる」は形式面だけでなく、意味の面でも固定化が見られる。「目を注ぐ」は具体的な動作を表す「注意してみる」 (24)と抽象的な意味を表す「注目する」 (25)の意味で使われるが、「目が注がれる」は(23)のような「注目する」の意味でしか使われない。

(24)「じゃあ、知らないと言うんだな？」わたしは彼に鋭く目をそそぎながら言った。

(25)(略)、やっぱり芥川というのは非常に真剣にそういうキリスト教的な世界に深く目を注いでいるわけです。

このように、「目が注がれる」は形式的にも意味的にも固定化し、慣用化が進んでいる表現になっている。「～の目が［着点を表すニ格の名詞句］注がれる」の形式で「～が～に注目する」の意味を表すという対応関係を記述し、それ自体を一つの独立した見出し項目として立てるべきであると思われる。

5.5【テ形節】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

131 個の「N を V」動詞慣用句のうち、テ形節でもっとも多く現れ半分以上を占めた慣用句を表 9 にまとめる。

表 9 【テ形節】に偏りが見られた「N を V」動詞慣用句

慣用句	使用回数	テ形節で使われる用例数	テ形節で使われる割合
心を込める	214	181	84.6%
かたずを飲む	102	71	69.6%
血相を変える	104	69	66.3%

[21]例えば、石田(2004: 48)は「連体修飾語の付加」ができない動詞慣用句として次のものを挙げている。

(i)（お目に掛ける）　*きれいな／*充血している／*先生のお目に掛ける
（耳にする）　*大きな／*するどい／*自分の耳にする
（頭に来る）　*大きな／*回転の速い／*いらいらした頭に来る
（歯が立たない）　*丈夫な／*きれいに磨いた／*私の歯が立たない

口をそろえる	177	112	63.3%
気を取り直す	242	125	51.7%
声を潜める	199	102	51.3%
胸を張る	417	210	50.8%

「テ形」で連用修飾の働きを持つ動詞慣用句があることは、森田(1985)でも指摘されている[22]。表 9 に示された慣用句は、ヲ格名詞に身体部分や心理状態を表す表現が来るという特徴があり、意味的には動作をする際に伴う心理状態や身体的特徴を表す。また、後続文との関係を見ると、「気を取り直す」を除いて慣用句のテ形節とその後続文とは「付帯状況」[23]の関係にある。例えば、(26)の「心を込めて作る」は「思いやりの気持ちがいっぱいである状態で作る」、(28)の「血相を変えて走ってくる」は、「顔色が大きく変わった状態で走ってくる」という意味を表す。(32)の「気を取り直して」は時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐ「継起」[24]の用法であると考えられる。

(26)マダムが心を込めて作ったケーキは、季節の果物を巧みに取り入れているのが特徴だ。(=(1))

(27)三つの村の住民たちは固唾をのんでこの恐ろしい戦いを待ちうけていた。

(28)豪姫を桜雪に乗せて集落へ向かっていると、竹蔵が血相を変えて走って来た。

---

[22]森田(1985: 41)は次の慣用句を挙げている。
「骨を折って手に入れた品」「手ぐすね（を）引いて待ち構える」
「地団駄（を）踏んで悔しがる」「身を粉にして働く」「泡を食って逃げる」
「図に乗っていい気になる」「人の口車に乗ってだまされる」
「人を煙に巻いて悦に入れる」「あっけにに取られて見守るばかり」
森田(1985: 41)
上記の慣用句のうち、「手ぐすねを引く」と「泡を食う」は本調査で【テ形節】で使われる用例がもっとも多い慣用句であるが、出現頻度が低いため表 9 に入らなかった。

[23]日本語記述文法研究会(2008: 286-287)によると、「付帯状況」は主体が同じで、従属節の事態が主節の事態に付随して成立している用法である。

[24]日本語記述文法研究会(2008: 283)。

(29)私たちを案内してくれたＣＯＦＩＤＥＣの幹部たちは、口を揃えて「衛生管理が最大のテーマ」と語っていた。

(30)ニエマンスは身を乗り出し、声をひそめて話を続けた。

(31)しかし、自分の出身地さえ胸を張って言えない人間が、世の中を胸を張って生きていけはしない。

(32)「やめるのはいつでもできる。もう一日がまんする。明日になったらもう一日がまんする。そのうちラーメンが食べられるようになるよ」その言葉に救われた。気を取り直して、一日一日をがんばった。

付帯状況を表すテ形で多く使われる「N を V」動詞慣用句は、副詞化し様態の副詞と同じ機能を果たしていると考えられる[25]。また、それによって修飾される動詞述語に決まったものが来るという傾向が見られる。表 9 の慣用句でこの現象が目立って見られたのは、「かたずを飲んで」が「見守る」との共起、「口を揃えて」「声を潜めて」と「話す、言う、答える、語る…」などの発話の意味を表す動詞との共起である。「かたずを飲む」はテ形節で使われる 71 例中、後続文に「見守る」が来るのが 35 例あり、ほぼ半分を占めている。「口を揃える」「声を潜める」は「話す、伝える」という意味が含まれているので、テ形節で使われる場合もほとんど後続文に発話の意味を表す動詞が来る[26]。

(33)世界中の人々が固唾をのんで３Ｄテレビを見守っていた。

(34)特に日本をお手本にしたいと誰もが口を揃えて言う。

(35)「桐野さん、あの言い方はないわ」声をひそめて冴子が言った。

---

[25]仁田(1995)は、付帯状態を表すテ形節は、主に事象の実現のされ方を表すものであり、その意味で様態の副詞と同趣の機能を果たしていると述べている。また、より副詞化したものとして、「あらためて、だまって、むきになって」のような一語（相当）のものと、「体力を振り絞って、先を争って」のような慣用句的になっているものがあるとしている。表 9 の慣用句も多くの場合テ形で後続する動詞（句）を修飾するという意味で副詞化していると言える。

[26]次例のように前文に会話文が来る例も見られ、このような文は言語を表す動詞が省略された（「～と声を潜めて言った」）と考えられる。

(i)奥に洗濯物がぶらさがっている。「やっぱり、あった。あれや」声を潜めて勝治は指をさしながら欄干の端で広之の肩を押さえつけた。

また、「胸を張る」は伝えるという意味が含まれていないが、テ形節で使われる場合発話の意味を表す動詞とも多く共起する。テ形節で使われる 210 例中、(36)のような後続文に「言う、話す、語る、答える」などの発話の意味を表す動詞が来る例が 100 例あり、半分近く占めている。

(36)私、頑張ってる。今日だけ胸を張っていえる。

以上で見たように、テ形節で多く現れる「N を V」動詞慣用句は、動作をする際に伴う心理状態や身体的特徴を表すものである。また、慣用句のテ形節はその後続文とほとんど「付帯状況」の関係にあり、それによって修飾される動詞述語に決まったものが来るという傾向が見られる。

6. まとめと今後の課題

冒頭で見たように、本稿は次の二つの目的を立てた。

(a)BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の出現頻度を調べる。

(b)「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏りからその慣用化した用法を記述する。

(a)について、本稿は 3.1 で述べた調査方法で BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の出現頻度を調べた。それにより「N を V」動詞慣用句の大半は出現頻度が低く、また、よく使用される高頻度の「N を V」動詞慣用句にはどのようなものがあるかも明らかとなった。先行研究で述べられているように、学習者の記憶の負担を減らすために、頻繁に使われる慣用句を優先して学習するのが効率的である。本稿は、均衡コーパスを使用し、コーパスにおける使用回数をなるべく正確に出すという調査方法で先行研究と違った、高頻度の動詞慣用句リストを提供できたと言える。

(b)について、本稿は 3.2 で述べた調査方法で BCCWJ における「N を V」動詞慣用句の動詞の形を調査し、その結果に基づいて慣用的な用法を記述した。動詞の形に偏りが見られた慣用句は、特定の表現と共起したり、文の特定の位置に現れたりなどの現象が見られた。

つまり、形式的な偏りはしばしば慣用的な用法と結びつくということである。従来の研究では動詞慣用句の緊密性を形式の変換可能性で定めているが、このような方法では、動詞慣用句にどのような慣用的な用法があるかを明らかにできず、日本語教育への応用が難しかった。本稿は、「N を V」動詞慣用句における動詞の形の偏りからその慣用的な用法に迫り、「N を V」動詞慣用句における慣用的用法を一部解明できた。

本稿は、「N を V」動詞慣用句を調査したが、同じく動詞慣用句に属する「N に V」、「N が V」タイプの動詞慣用句も調査する必要があると思われる。また、日本語教育により全面的な資料を提供するには動詞慣用句だけでなく、すべての種類の慣用句やことわざの頻度調査も必要であると思われる。合わせて今後の課題としたい。

〈付記〉本稿は「以語料庫為本的日語動詞慣用句研究-由形式分布的觀點-」(助成番号 111-2410-H-004-094-)、「以語料庫為本的日語動詞慣用句研究-由形式分布的觀點 (II)」(助成番号 112-2410-H-004-040 -)の研究成果の一部である。また、査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心から御礼を申し上げたい。

参考文献

赤瀬川史朗、プラシャント・パルデシ、今井新悟(2017)『日本語コーパス活用入門: NINJAL-LWP 実践ガイド』大修館書店

飛鳥博巨(1982)「日本語動詞慣用句の階層性」『言語』大修館書店 11-13 pp.72-81

石田プリシラ(1998)「慣用句の変異形について－形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース pp.43-56

石田プリシア(2000)「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7 国立国語研究所 pp.24-43

石田プリシア(2004)「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として—」『国語学』55-4 日本語学会 pp.42-56
北村達也、川村よしこ(2017)「新聞記事における慣用表現の出現頻度調査」『甲南大学紀要　知能情報学編』10-1 甲南大学 pp.25-33
計量国語学会編(2017)『データで学ぶ日本語学入門』朝倉書店
国立国語研究所(1984)『国立国語研究所報告 78　日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
呉琳(2017)『コーパスに基づく日本語慣用句の研究』北海道大学博士学位申請論文
坂本勉(1982)「慣用句と比喩：慣用化の度合いの観点から」『言語学研究』1 京大言語学研究室 pp.1-21
佐藤理史(2007)「基本慣用句五種対照表の作成」『情報処理学会研究報告= IPSJ SIG technical reports 2007』35 一般社団法人情報処理学会 pp.1-6
蘇振軍(2018)「日本語母語話者と学習者による定式表現の産出過程の研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部,文化教育開発関連領域』67 広島大学大学院教育学研究科 pp.211-220
ダニー・ミン、佐野洋(2001)「日本語学習者のための慣用句データベースの作成－統計処理を用いた一手法の提案－」『情報処理学会研究報告= IPSJ SIG technical reports 2001』122 一般社団法人情報処理学会 pp. 55-62
橋本力、河原大輔(2008)「日本語慣用句コーパスの構築と慣用句曖昧性解消の試み」『情報処理学会研究報告= IPSJ SIG technical reports 2008』67 一般社団法人情報処理学会 pp.1-6
仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版 pp.87-126
日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版

日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文 第 4 部ヴォイス』くろしお出版
益岡隆志、田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版』くろしお出版
宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院
宮地裕(1985)「慣用句の周辺－連語・ことわざ・複合語－」『日本語学』4-1 明治書院 pp.62-75
籾山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社
森田良行(1985)「動詞慣用句」『日本語学』4-1 明治書院 pp.37-44
森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院

付録

順位	慣用句	使用回数	順位	慣用句	使用回数
1	声をかける	3981	67	力を貸す	189
2	気をつける	3888	68	目を落とす	187
3	顔を出す	1221	69	鼻を鳴らす	185
4	手を出す	971	70	目を奪う	183
5	耳を傾ける	952	71	胸をなで下ろす	182
6	力を入れる	929	71	我を忘れる	182
7	目をやる	924	73	言葉を返す	181
8	目を覚ます	844	74	口をそろえる	177
9	首をかしげる	803	74	生計を立てる	177
10	目をつぶる・つむる	787	76	目を背ける	171
11	手を付ける	742	77	精を出す	169
12	足を運ぶ	722	78	手を抜く	164
13	背を向ける	684	79	手を入れる	157
14	腹を立てる	650	80	頭を抱える	151
15	手を打つ	625	81	メスを入れる	145
16	息をのむ	607	82	レッテルをはる	144
17	物を言う	602	83	世話を焼く	141
18	目を通す	586	83	手を掛ける	141
19	目を見張る	556	85	息を詰める	140
20	口を挟む	513	86	群を抜く	139
21	目を付ける	460	87	見切りをつける	138
22	手を取る	458	88	腰を据える	137
23	念を押す	457	89	寝返りを打つ	136

24	目を離す	452	90	腕を振るう	135
25	まゆをひそめる	440	90	筆を執る	135
26	手を引く	430	92	流れをくむ	134
27	口をつぐむ	429	92	磨きを掛ける	134
28	胸を張る	415	92	目を注ぐ	134
28	気を配る	415	95	くぎを刺す	133
30	目を凝らす	392	96	根を下ろす	132
31	手を貸す	361	96	目をむく	132
32	目を引く	346	96	知恵を絞る	132
33	口を利く	341	99	胸を打つ	130
34	気を失う	300	100	手を焼く	127
35	手を合わせる	297	101	幕を閉じる	125
36	耳を澄ます	292	102	心を打つ	124
37	命を懸ける	280	102	引けを取る	124
38	世を去る	275	104	とどめを刺す	121
38	相づちを打つ	275	105	目を配る	119
40	声を立てる	271	105	度肝を抜く	119
41	首をひねる	265	107	聞き耳を立てる	118
42	唇をかむ	251	107	目を疑う	118
42	歯を食い縛る	251	109	息を殺す	117
44	足を伸ばす	245	110	小首をかしげる	116
45	気を取り直す	242	110	身を寄せる	116
46	手を差し伸べる	236	110	高をくくる	116
47	注目を浴びる	230	113	頭をもたげる	114
48	工夫を凝らす	229	114	手を借りる	113
49	拍車をかける	222	115	気をもむ	112
50	あぐらをかく	221	115	人目を引く	112
51	足を引っ張る	217	117	首を突っ込む	110
51	口を出す	217	117	心を痛める	110
51	肩を並べる	217	119	身を固める	109
54	脚光を浴びる	215	119	だだをこねる	109
55	心を込める	214	119	頭角を現す	109
55	身を引く	214	122	幕を開ける	108
57	用を足す	212	123	水を差す	106
58	後れを取る	211	124	愛想を尽かす	104
59	耳を貸す	205	124	血相を変える	104
60	尾を引く	202	126	目を掛ける	103
61	声を潜める	199	127	耳を疑う	102
61	端を発する	199	127	かたずを飲む	102
61	実を結ぶ	199	129	腰を抜かす	101
64	きびすを返す	198	130	不意を突く	100

65	肩を落とす	197	130	手を延ばす	100
66	息を引き取る	190			